

方言の調査法に関する一考察

佐藤 亮 一

キーワード：方言調査法 音声調査法 なぞなぞ式 場面設定式
会話分析

要旨

方言調査において、従来用いられてきた「なぞなぞ式調査法」は、共通語音声が出現しやすく、方言音声を採集するために適切な手段とは言えない。また、日常の言語使用の状況を調査するときに、場面設定式調査にも限界があることを認識すべきである。

調査の動機

方言語彙および方言音声の調査は「なぞなぞ式」と呼ばれる方法で行われるのがふつうである。「なぞなぞ式質問法」とは、目的の単語の語形を示さずに単語の意味を説明したり、絵や実物を見せて

単語を答えさせる方法である。国立国語研究所編『日本語言語地図』の調査は、ほとんどの項目がこの方法で行われた。たとえば「大きな犬が何匹もほえかかって、いまにもかみつきそうになる。そんな時の感じをどんなだと言いますか」「(こわい)、(鏡の絵を見せて)こういうふうにするものを何と言いますか」「(かがみ)の「が」の音声」という具合である。

「なぞなぞ式」が採られる理由は、一つには標準語を先に提示してしまうとその語形にひきずられて日常使っている方言が出てくるといふことがある。「コワイということは何と言いますか」と聞けば「コワイ」と答え、「オソロシイということは何と言いますか」と聞けば「オソロシイ」と答え、「オッカナイことを何と言いますか」とたずねれば「オッカナイ」と答えるというところは、大いに有り得る。しかし、もっと重要なことは、標準語形の持つ意味が地方

の人々に正しく理解されるとは限らないことにある。たとえば「アザ」のことを何と言いますかとか「ホクロ」のことを何と言いますか」という質問は東北地方や九州地方の高年齢層にとってまったくナンセンスである。東北地方では「あざ」も「ほくろ」も区別せず「アザ」と呼んでいる。九州では、標準語の「あざ」を「ホクロ」と言い、「ほくろ」を「アザ」と呼ぶ逆転現象が起こっている。「かまきり」を「トカゲ」、「とかげ」を「カマキリ」と言う地方もある。そのような地方では「アザ」「ホクロ」「カマキリ」「トカゲ」という語形からイメージするものが東京方言話者とは異なるのである。

音声の場合にも、調査者が標準語音声で、「机」と言ってみてください」と言ったり、「机」という文字を見せて話者に読ませたりすると「ツグエ」という方言音声が出てくいと考えられている。方言音声の調査では「なぞなぞ式調査法」が絶対条件とされていると言っている。

しかし、「なぞなぞ式」ならば、話者が日常使用している方言音声がかならず出現するのだろうか。筆者はこの点に疑問を持ち、山形県庄内地方で実験的調査を行った。

この調査を行うきっかけは、国立国語研究所が山形県鶴岡市で行っている継続調査の報告にあった。国立国語研究所では、鶴岡市で約二〇年間隔で同一の項目について調査を実施し、地域社会にお

ける言語変遷の状況を調べている。第一回の調査は一九五〇（昭和二五）年に、第二回は一九七二（昭和四七）年、第三回は一九九二（平成四）年に行われた。第三回目の調査結果は未報告であるが、第一回と第二回の調査結果は公表されている。図1は鶴岡調査における音声項目の共通語得点（満点は三二点）である。二〇年の間に共通語化が大きく進行しており、一九七二年の調査では最若年齢はほぼ完全に共通語化しているように見える。しかし、鶴岡市内の若者の会話を観察すると、音声を含めて、よそものにはきわめて分かりにくい方言色豊かな言語が用いられており、このグラフが日常の言

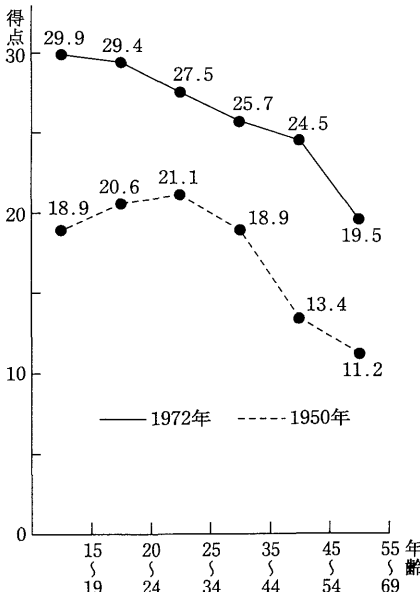


図1 年齢別音声得点（鶴岡調査）

語生活における音声の実態を反映しているとは考えにくい。そこで、筆者は、山形県東田川郡三川町で、方言調査法の問題点を探ることを目的の一つとして調査を行った²⁾。三川町は鶴岡市の隣町で、方言圏は鶴岡市と同じである。

三川町における調査

調査は、語彙・文法・アクセント・音声に関して、

- 1 さまざまな式質問法
- 2 場面設定法(場面を設定し、単語ではなく、文全体を答えさせる方式)

3 調査文朗読法(アクセント項目のみ)

の三種の調査法を用意し、「場面」に関しては、

- ア その時で親しい友人と話す場面(下位場面)
- イ その土地でややあらたまつて話す場面(中位場面)
- ウ 東京の初対面の人と話す場面(上位場面)

の三場面を設定した。なお、場面アに関しては、インフォーマントに最も親しい地元の友人名をあげてもらい、その人物に対することばを尋ねることにした。

さらに、初対面のよそものの調査員と顔見知りの地元の調査員ではインフォーマントの反応が異なることがありうると考え、

A よそものの研究者による共通語を用いた調査(以下「研究者調査」と呼ぶ)

B 地元(三川町)の顔見知りの調査員による方言を用いた調査(以下「三川町調査」と呼ぶ)

の二種の調査を行った。AとBは同一の項目について、約三か月の間隔をおいて行い、Bの調査の調査員には、地元の三川町の方言研究会のメンバー(中年男性数名)を起用した。

主な調査項目は次のとおりである(語Ⅱ語彙、文Ⅱ文法、音Ⅱ音声、アⅡアクセント)。

感謝の挨拶(語)／謝罪の挨拶(語)／別れの挨拶(語)／留守番(語)／着飾る(語)／この前から(語)／いくら(値段をたずねるとき)(語)／びっくりする(語)／びり(語)／いつも(語)／じっとしている(語)／知っている(語)／知らない(語)／そうです(肯定)(語)／二人称代名詞(文)／静かなら(文)／筆やら紙やら(文)／用事があるからあさってにしてくれ(文)／しなければならぬ(文)／傘(ア)／知事(音)／地図(音)／からす(ア)／佐藤さん(ア・音)／背中が痛くて(文・ア・音)／肩が痛くて(文・ア・音)／どこに行くのか(語・文・音)／どこに捨てればよいか(語・文・ア・音)／猫にひっかかれる(語・

文・ア・音) / 先生に叱られる(語・文・ア・音)

調査法および調査結果の見本として、一九六五年生まれの男性(調査当時二三歳)の回答例を次に掲げる。

調査項目「背中」(アクセント・音声)

1 なぞなぞ式……(自分の背中をたたいて)からだのこの部分を何と言いますか。

A (よそものの調査員に対する回答) セナカ

B (地元の調査員に対する回答) シエナガ

2 場面設定式(下位場面)……○○さん(具体人物名)に「この前から背中が痛くて困っている」と言うとしたら、どんなふうに言いますか。

A コノメガラ セナガ イテクテ コマッタナヤ

B コノメガラ シエナガ イデグデ コマッタナヤンナ

3 場面設定式(中位場面)……鶴岡の病院で「この前から背中が痛くて困っている」と言うとしたら、どんなふうに言いますか。

A コノメガラ セナガ イデクテノー

B コノメカラ セナガ イデグデ コマッテアンケドモ

4 場面設定式(上位場面)……東京の病院で医者に「この前か

ら背中が痛くて困っている」と言うとしたら、どんなふうに言いますか。

A コノメカラ セナカガ イタクテ コマッテルンデ
スケドモ

B コノメカラ セナカガ イタクテ コマッテルンデ
スケドモ

5 調査文朗読法……(「背中が痛い」の文を見せて)この文を標準語風の発音で読んで下さい。

A セナカガ (Bは調査せず)

調査項目「猫に」(アクセント・音声・文法)

1 なぞなぞ式……ニャーニャーと鳴く動物はなんですか。

A ネコ

B ネゴ

2 場面設定式(下位場面)……猫に引つかかれて手に傷ができたとします。○○さん(具体人物名)に「その傷はどうしたのか」と聞かれたらなんと答えますか。

A コノキズガ。ネゴガラ カチャバカエタ

B ネゴガラ カチャバガエダナヤ

3 場面設定式(上位場面)……東京の人に「その傷はどうした

のか」と聞かれたらなんと答えますか。

A チョット ネコニ ヒツカカレチャツテ

B ネコニ ヒツカカレタンデス

4 調査文朗読法……〔猫がいる〕の文を見せて〕この文を標

準語風の発音で読んで下さい。

A ネコガク（Bは調査せず）

調査項目「からず」（アクセント）

1 なぞなぞ式……カアカア鳴く黒い鳥はなんですか。

A カラス

B カラス

2 場面設定式（下位場面）……遠くの方に鳥が見えます。○○

さんに「あの鳥はなんだろう」と聞かれて「からずではないか」と答えるとしたらなんと言いますか。

A カラスデ ネガ

B タブン カラスデネー

3 場面設定式（上位場面）……東京の人に聞かれたらなんと言いますか。

A カラスジャ ナイデスカ

B アレワ カラスジャ ナイデスカ

4 調査文朗読法……〔からすが鳴く〕の文を見せて〕これを

標準語風の発音で読んで下さい。

A カラスガク（Bは調査せず）

以上に見られるように、このインフォーマントは場面によって方言と共通語を使い分けており、その使い分けは音声やアクセントにも及んでいる。すなわち、下位場面（地元の親しい友人に話すとき）では「シエナガ」（または「セナガ」）、「ネゴ」、「カラス」という方言音声・アクセントになり、上位場面（東京の人と話すとき）では「セナカ」、「ネコ」、「カラス」という共通語の音声・アクセントが出現している。助詞に関しても「猫カラ（ひっかかれる）」という方言的な用法を上位場面では「猫ニ」と言い替えている。しかし、地元の調査員に対しては、上位場面でも「セナカガ」、「カラスジャナイデスカ」のような方言アクセントが出現することがある。よそもの調査員（A）と地元の調査員（B）とでは、とくに「なぞなぞ式」の場合に差が見られ、Aでは共通語の音声・アクセント、Bでは方言の音声・アクセントが出現しやすい。このように、なぞなぞ式の場合に、よそもの調査員に対しては方言の音声・アクセントが出ていくという現象は、方言調査でなぞなぞ式を用いることの妥当性に疑問を投げかけるものである。

表1 方言形出現率 (%)
(下位場面及び「なぞなぞ式」)
(三川町調査 1988)

	若	中	高	全	な
語	66	77	75	74	74
文	96	93	82	90	89
音	66	78	70	72	49
ア	70	83	86	88	85
全	73	82	78	81	72

ける若年層・中年層・高年層の平均値」と「な」(なぞなぞ式)における各年齢層の平均値)とを比べてみると、語彙、文法、アクセントの項目では両方式の数値にほとんど差が見ら

以上、あるインフォーマントの事例について考察した。それでは、調査結果全体としてはどうか。表1は、場面設定式の下位場面(親しい友人と話すとき)および「なぞなぞ式」について、方言形(方言的特徴)の出現率を示したものである(研究者調査の場面)。「なぞなぞ式」(略号「な」)の欄以外はすべて場面設定式であり、場面設定式は「語彙」(略号「語」)、「文法」(文)、「音声」(音)、「アクセント」(ア)の項目別、また、「若年層」(略号「若」)、「中年層」(中)、「高年層」(高)の世代別に示した。表1における場面設定式となぞなぞ式とを比べてみよう。表1の場面は「親しい友人と話すとき」という設定であり、なぞなぞ式も同様に「親しい友人と話すときのことばを答えてください」と調査の冒頭で示している。したがって、インフォーマントの内省が適切になされれば両者の数値に大きな差は出ないはずである。表1で「全」(場面設定式)における若年層・中年層・高年層の平均値」と「な」(なぞなぞ式)における各年齢層の平均値)とを比べてみると、語彙、文法、アクセントの項目では両方式の数値にほとんど差が見ら

れないが、音声項目では、場面設定式が七十二%、なぞなぞ式が四十九%であり、両者の差はかなり大きい。この結果は、なぞなぞ式は場面設定式に比べて日常使用している方言音声が出にくいことを示している。今では古いも若きも方言と共通語を使い分けて生活している。すなわち共通語を使用する能力を持っている。初対面のもの調査員に共通語で質問され、単語言いきりの形(なぞなぞ式)で答えさせれば、多くのインフォーマントは(無意識のうちに)能力として持っている共通語の音声で発音してしまうのではないだろうか。

このことは、最初に示した国立国語研究所の鶴岡調査でも言える。鶴岡調査でも音声・アクセント項目はなぞなぞ式で質問している。図1で若年層の音声完全に共通語化しているように見えるが、これは鶴岡の若年層の共通語能力を示す数値であって、日常の言語生活では方言音声がある程度使用していると推定される。

なお、表1で、語彙、文法、アクセントについては場面設定式となぞなぞ式との差が小さい。この事実は、語彙や文法項目では、「親しい友人に向かって使うときのことばを答えてください」という指示(場面設定式となぞなぞ式の両方で指示)が守られやすいこと、すなわち、インフォーマントが語彙や文法については場面把握についての内省力があることを示していると考えられる。アクセセン

ト項目で両方式の間の差が小さいのは、現段階では三川町のインフォーマントの共通語アクセント使用能力が小さいためであろう。先に例として示した一九六五年生まれ（調査当時二三歳）の男性の場合には共通語アクセントを使用する能力を有している。このインフォーマントは、よそものの調査員がなぞなぞ式で質問した場合や文を読ませた場合には「セナカ」「ネコ」「カラス」のように共通語の音声・アクセントで答え、場面設定式の下位場面（親しい友人に話す場合）では「セナガ（シエナガ）」「ネゴ」「カリス」のように方言の音声・アクセントで回答している。アクセントも共通語と方言を使い分ける時代に入りつつあり、これからは、従来、多くの方言研究者が行っているような「文を読ませる調査」や「単語を言わせる調査」（なぞなぞ式）では、日常使われている方言アクセントを得ることがむずかしくなるのではないだろうか。

以上、従来方言音声調査の鉄則のように考えられてきた「なぞなぞ式調査法」は、方言と共通語の使い分けが進んできた今日では、方言音声を引き出す方法としては適切ではないことを述べた。

次に、三川町で試みた「よそものの研究者による共通語を用いた調査」（調査A）と「地元の調査員による方言を用いた調査」（調査B）との比較を表2と表3に掲げる。下位場面における方言形出現率は調査Bの方が高く、上位場面における共通語形出現率は調査A

表2（下位場面における）表3（上位場面における）
方言形出現率 共通語形出現率

〈三川町調査 1988〉

	A	B		A	B
語	74	79	語	85	76
文	90	90	文	50	48
音	72	85	音	68	57
ア	88	91	ア	23	10
全	81	86	全	56	45

ろう。なお、アクセント項目は、表3（上位場面）に限って調査Aの数値が調査Bよりも高いことが注目される。これはインフォーマントの潜在的な共通語アクセント使用能力を示すものと考えられるが、この点については機会を改めて論じたい。

会話の分析

前節では、音声項目に関して、場面設定式がなぞなぞ式に比べて方言的特徴が出現しやすいことを述べた。それでは、場面設定式の

の方が高いという仮説のもとに調査を行ったが、表に示したように、音声（下位場面と上位場面）とアクセント（上位場面）を除いては両者の差はそれほど大きくなかった。これは、先に述べたように、語彙・文法項目は音声・アクセントに比べて与えられた場面に即した内省が容易であることによるものであ

場合には日常の言語生活における方言的特徴がくまなくあらわれるものであるか。場面設定式もあくまでもインフォーマントの省内に基づくものであるから、現実の言語使用状況とはずれが生じることも予想される。

その点、方言の会話を録音し、文字化した資料は、比較的現実の言語生活を反映するのではないかと考えられる。

方言会話の文字化資料によって方言使用の世代差を見よう。次に示すのは鳥取県八頭郡家町における老年層と若年層との会話で、Aは明治三〇年生まれ、Bは昭和二六年生まれ、Cは昭和三二年生まれである。^③

- C マー ウチラ 次男ダケー ドゲデモエーワツチャーニ(良いわというように) 思ツトルケド 長男ノ方ワ(百姓を) スル気モナゲナシヨ(なさそうだしよ)。
- A マー 百姓ガ オモシロー ナツテキタラ ホンマモン(本物) デスケドモナー。
- B ソーデスナ。マー 自分デ ドコニ行ツテモ ウラー(おれは) 百姓ダツテ言エルヨーナ 人ナラネー。(略)
- C 現在デモ 昔ノ 世襲制度ガ 残ツトルヨーナ 感じデスケーナー。

A マー ソリヤー 百姓デ ノンキニ ヤリオルノガ 一番イーデアネーカナ。

方言色の認められる部分に波線を付したが老年層のAと若年層のBCとの間に際立った差はないように見える。しかし、会話全体を詳しく見ると、Aには連母音aiの融合が原則的に認められるのに対して、BとCにはほとんどそれがない(Bはauに当たる部分a:になることがある)。若干の例を出してみよう。

A ワカエー(若い)、ミタエー(〜みたい)、ナエーダローカ、カエーアツメテ(買い集めて)、ソガエーナ(そのような)、キカエーガ(機械が)、シマエーニヤ(しまいには)、ホツカエードー(北海道)、ニヒョーグラエー(二俣ぐらい)、ダエーター(大体)、カマエーセン(かまいやしない)

B サイター(最低)、ジダイガジダイダカラ、キキタイコトガ、カイリョー(改良)、キカイカダオレ(機械化倒れ)、ソレイガイニ、キンダイカニ(近代化)、言エルヨーナ、言ワレタクナイ、ソガエーニ(そのように)、アガエーニ(あのよう)、ナリターモ(なりたくも)、スキナヤーニ(好きなように)、ウラヤマシヤーナ(うらやましいような)

C タイギ(大儀)、キカイカ(機械化)、ダイタイ、タイシテ、カイリョー(改良)、ソクナコトワナイ、コナイダ(この間)

表 4 方言的特徴出現率 (郡家町)

話者	文節	音声	語彙	文法	全体
A	341	41	18	38	97
		12.0%	5.3%	11.1%	28.4%
B	445	13	10	28	51
		2.9%	2.2%	6.3%	11.5%
C	115	3	9	20	32
		2.6%	7.8%	17.4%	27.8%

表 5 連母音融合率 (郡家町)

話者	全体	無	ai, ae>ε:	au>a:
A	37	6	27	4
		16.2%	73.0%	10.8%
B	45	37	2	6
		82.2%	4.4%	13.3%
C	18	18	0	0
		100%	0%	0%

(共通語化している部分に傍線を付した)
Aには「機械」「北海道」のような語にも融合が見られるが、Bの融合形は「ソガエーニ」「アガエーニ」のような俚言形に限られている。

郡家町の文字化資料全体について、方言的特徴の出現率(会話全体の文節数に対する方言的特徴のある文節数の出現率)を表4に示す。全体として世代差よりも個人差の方が大きい、音声的特徴は高年層Aの数値が高い。この傾向は連母音の融合に関して特に顕著

である(表5)。

会話と場面設定式とは、方言的特徴の出現率に違いがあるのだろうか。場面設定式と会話資料を同一人物について比較したものに、水田裕子の卒業論文がある⁽⁵⁾。これは山形県三川町の高年層・中年層・若年層の各二名(合計六名)について、地方共通語の実態を調査することを目的として、場面設定式(東京からきた人物II調査者である水田本人に対する会話という場面設定)と会話(水田裕子本人との雑談)とに現れる方言的特徴を比較したものである(場面設定式では標準語の文を提示し、それを話者が使用するであろう表現に翻訳させている)。その結果、全文節数に対する方言的特徴が出現する文節数の割合は、場面設定式では、若年層A……一%、若年層B……一三%、中年層C……二九%、中年層D……二四%、高年層E……八%、高年層F……一〇%であった。これに対して、会話では、A……二七%、B……一九%、C……三四%、D……四三%、E……六〇%、F……五九%であった。すなわち、どの話者についても、会話の方が場面設定式よりも方言的特徴の出現率が高く、その差は高年層において特に著しい。このことは、会話では上位場面(東京の人と話す場面)でもある程度方言が混じるが、場面設定式では、話者が能力として潜在的に所有している共通語がより多く出現する傾向が強く、その傾向は高年層において著しいことを意味

する。中年層が若年層や老年層に比べて場面設定式でも方言を比較の答えているのは、中年層が調査者に対して構えることなく、日常の言語を内省するためであろうか。

それでは、下位場面（地元の親しい友人と話す場面）における場面設定式と会話との差はどうであろうか。この点に関して同一人物を比較した資料はない。しかし、水田は三川町で下位場面における場面設定式調査も行っており、これとは別に、辻千尋は方言の世代差を調査する目的で、水田と同じ三川町で、若年層四名、老年層四名を対象に、同年輩の友人との会話を録音し、その中に現れる方言的特徴を分析している⁽⁶⁾。

両者を比較すると、方言的特徴の出現率は、場面設定式（水田調査）では、若年層平均……五八％、老年層平均……六八％であり、会話（辻調査）では、若年層平均……四四％、老年層平均……六五％である。調査対象者が異なるので、同列には比較できないものの、両者の数値に大きな差が見られないことが注目される。すなわち、下位場面（地元の親しい友人と話す場面）では、場面設定式（標準語文提示式）でも、日常の言語生活に近い表現が得られるのではないかと考えられる。

筆者は、これからの地域言語研究においては、方言（地元の親しい人とくつろいで話すときに使用することば）ばかりではなく、地

方共通語（地元であらたまって、あるいはよその地方の人と話すときに使用する方言混じりの共通語）の調査研究も重要であると考えている。そのためには、各地のいろいろな階層の人々について、その人たちがよその地方の人とあらたまって話をするときの会話を録音し、その中に現れる方言的特徴を記述し、分析すべきである。

注（一） 国立国語研究所『地域社会の言語生活―鶴岡における20年前との比較』（一九七四・秀英出版）

（二） 調査は一九八八年に、筆者が企画し、江川 清、江端義夫、加藤和夫、佐藤和之、真田信治、沢木幹栄、杉戸清樹、水野義道の各氏、および、三川町方言研究会の会員諸氏の協力を得て実施した。

（三） 国立国語研究所『方言談話資料（8）―老年層と若年層との会話―』（一九八五・秀英出版）。なお、この会話は昭和五一年に収録したもので、その当時の「若年層」である。

（四） 表4と表5の数値は工藤香寿美（フェリス女学院大学大学院生のレポート）による。

（五） 水田裕子「地方共通語に関する研究―その使い分けの意識と実態。山形県東田川郡三川町における世代差―」（東京女子大学一九九九年卒業論文）

（六） 辻 千尋「方言の世代差に関する研究―山形県三川町方言における会話資料を用いて」（東京女子大学一九九九年卒業論文）

（東京女子大学教授）